

ヨシュア記 通読



(1月30日)「ヨシュア記10:1~6」

アモリ人の五人の王、すなわちエルサレム、ヘブロン、ヤルムト、ラキシユ、エグロンの王たちとその全軍勢は連合して攻め上り、ギブオンに向かって陣を敷き、戦いを仕掛けた。
(ヨシュア記10章5節)

- ・ヨルダン川を渡り「約束の地」に入ったイスラエルの民はまず、エリコを手に入れます。さらにアイを滅ぼし、ギブオンの人たちと協定を結びます。この物語は「大河ドラマ」のように、人々に伝えられていったのでしょうか。
- ・ギブオンの人たちはヨシュアたちをだまして服従するのですが、決して戦力が劣っているわけではありませんでした。アイよりも大きかったので、「反イスラエル軍」を作るならば、その主力となっていたことでしょう。
- ・しかしそのギブオンの人たちですら協定を結んだことを知り、エルサレム、ヘブロン、ヤルムト、ラキシユ、エグロンの王たちは連合軍を作ります。力を合わせて「外敵」に立ち向かうのです。そしてまず「裏切者」であるギブオンを攻め込むのです。

(1月31日)「ヨシュア記10:7~15」

主はヨシュアに言われた。「彼らを恐れてはならない。わたしは既に彼らをあなたの手に渡した。あなたの行く手に立ちはだかる者は一人もない。」
(ヨシュア記10章8節)

- ・ヨシュア率いるイスラエル軍は、ギルガルから出て「連合軍」を攻撃します。ただしここで実際に戦ったのは、ギブオン軍だけでもイスラエル軍だけでもありませんでした。神さまの力が大きく現されていました。
- ・神さまは天から大石を降らせませす。それは雹となり、その雹によって剣で殺された人たちよりも多くの人々が亡くなったそうです。「主はイスラエルのために戦われた」と書かれている通りです。
- ・「聖戦」や「神風」など、神さまの力が自分たちに味方し、戦いを後押しするという考え方はよく見られます。しかしそれは、「正義」と「悪」とをはっきり区別することにもつながります。このような聖書の言葉を、文字通り捉えるのは危険なように思います。

(1月1日)「ヨシュア記1:1~9」

強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。

(ヨシュア記1章6節)

- ・今年ヨシュア記・士師記・ルツ記・サムエル記上・下という旧約聖書の5巻を読んでいきます。ヨシュア記はモーセの後継者であるヌンの子ヨシュアが、「約束の地」であるカナンにイスラエルの人々を導く物語です。
- ・エジプトを出てきた人々のうち、40年後にカナンの地に入ることができたのは、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブだけでした。モーセやアロンを含む多くの人たちは神さまのみ心に背き、その地に入る前に死んでしまうのです。
- ・ここからイスラエルの人々がどのようにして、約束の地へ入っていくのが語られていきます。ただ平和的にその土地に入るのではなく、かなり強引に奪っていくという印象も与えられます。そのことに注意して、読んでいくようにしましょう。

(1月 2日)「ヨシュア記1:10~18」

我々はモーセに従ったように、あなたに従います。どうか、あなたの神、主がモーセと共におられたように、あなたと共におられますように。

(ヨシュア記1章17節)

・「主があたえてくださったもの」、そのようにヨシュアは語ります。現代でもこの言葉を信じている人が多くいるのをご存じでしょうか。この言葉を盾にして、土地を強奪しているといっても過言ではありません。

・月のようにだれも住んでいない場所に、早い者勝ちで入植するのであればそれもいいでしょう。しかし「約束の地」カナンには、実際に人が住んでいました。その人たちの権利はどうなるのでしょうか。

・わたしたちがこの物語を読むときには、今の土地や場所と混同してしまわないようにしましょう。この物語はあくまでも、歴史上の神さまと当時のイスラエルの人々との関係を描いたものだということをいつも心に留めておきましょう。

(1月 3日)「ヨシュア記2:1~7」

ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。二人は行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まった。

(ヨシュア記2章1節)

・ヨシュアは自分たちがエリコに入る前に、二人の斥候を送り込みます。斥候とは敵の状況や地形などを偵察・監視するために、本隊から先行して派遣される少人数の人たちを指します。いわゆるスパイです。

・彼らは遊女ラハブのところに泊まります。遊女とは娼婦と同じように、聖書の中では罪人と定められていたような人です。しかしヨシュアの斥候たちは、遊女ラハブのところに身を隠します。

・ラハブはエリコの中でも、差別されていたのではないのでしょうか。ヨシュアの斥候は、エリコの人々から見ると敵になる人たちです。しかしラハブはその人たちをかくまいました。神さまは「罪人」と人々が呼んでいた人さえも、用いられるのです。

(1月 28日)「ヨシュア記9:16~21」

イスラエルの人々は、共同体の指導者たちがイスラエルの神、主にかけて誓いを立てていたのに、彼らを攻撃はしなかったが、共同体全体は指導者たちに不平を鳴らした。

(ヨシュア記9章18節)

・三日後に、ギブオンの人たちは実は近くに住んでいたということが判明します。普通であればだまして結んだ協定です、反故にされてもおかしくはありません。しかしヨシュアはそうすることをしませんでした。

・それはすでに、「誓った」からです。誓うという行為は、神さまが介入している契約です。マタイによる福音書5章33~37節には、「誓ってはならない」というイエス様の言葉が載せられています。

・神さまの名をみだりに用いたり、軽々しく誓いを立てたりすることはよくないということを、イエス様は後に言われています。ヨシュアはギブオンの人たちと、神さまのみ心を確かめずに協定を結んでしまいました。「覆水盆に返らず」です。

(1月 29日)「ヨシュア記9:22~27」

御覧ください。わたしたちは今はあなたの手の中にあります。あなたが良いと見なし、正しいと見なされることをなさってください。

(ヨシュア記9章25節)

・この9章の一連の流れをみると、ギブオンの人たちが賢く、ヨシュアは失敗したという構図になっています。しかし結果的にギブオンの人たちはイスラエルの奴隷になり、芝刈りや水くみをして暮らします。

・少し納得いかない部分もありますが、ギブオンの人たちのこの言葉にも思いを馳せたいと思います。「わたしたちは今はあなたの手の中にあります」。彼らは自分たちの弱さを認め、そこで生かされることだけを求めたのです。

・大きく考えると、神さまとわたしたちの関係も同じようなものかもしれません。わたしたちは神さまの憐れみによって生かされ、神さまに与えられた賜物を用いて生かされていく。でもやっぱり、ギブオンの人たちはかわいそうですね。

(1月 26日)「ヨシュア記 9:1~7」

イスラエル人はそのヒビ人に言った。「お前たちは、我々と共にここに住んでいるのだろう。どうして協定を結ぶようか。」

(ヨシュア記 9 章 7 節)

・イスラエルの人たちがアイを滅ぼしたことは、周りの他の民族に恐れを抱かせます。ただ打ち破るだけではなく「一人残らず」、「ことごとく」という表現が示す通り、とても残酷な状況を生み出していったのでしょう。

・多くの王は結託して、イスラエルの人たちに立ち向かおうとします。戦わないと家族もろとも殺されてしまう。そうであれば戦うしかない。その思いはよくわかります。自分がその場にいても、そうしたかもしれません。

・ところがギブオンの住民だけは、何とか生き延びようと策を練ります。自分たちは遠い国から来たことにして協定を結ぼうというのが、彼らの策です。そのために彼らは、賢く立ちまわるのです。

(1月 27日)「ヨシュア記 9:8~15」

ヨシュアは彼らと和を講じ、命を保障する協定を結び、共同体の指導者たちもその誓いに加わった。

(ヨシュア記 9 章 15 節)

・ギブオンの人たちはイスラエルと協定を結ぶために、パンやぶどう酒の革袋、自分たちの外套や靴にも細工をしました。その姿を見て、ヨシュアはギブオンの人たちと協定を結びます。だまされたと言ってもいいかもしれません。

・このときヨシュアは、神さまの指示を求めませんでした。本来であればすべてを滅ぼすようにというのが、神さまの命令だったはずですが。(とても怖いことです)。その中でギブオンの人たちは賢いおこないによってその命をつなぎます。

・この出来事はヨ、シュア記 2 章に出てきたラハブのおこないにも通じるものがあります。ラハブもその賢さによって、自分たちの命を守ります。「長いものに巻かれる」ことも、大事だということなのでしょう。

(1月 4日)「ヨシュア記 2:8~14」

わたしはあなたたちに誠意を示したのですから、あなたたちも、わたしの一族に誠意を示す、と今、主の前でわたしに誓ってください。そして、確かな証拠をください。

(ヨシュア記 2 章 12 節)

・遊女ラハブは、イスラエルの人々がエジプトを出るときに神さまがなさったことや、他の国に対しておこなったことを知っていました。遊女の元には、様々な情報が集まっていたのでしょう。

・ラハブはヨシュアの斥候に、交換条件を出します。それは自分が二人を助ける代わりに、自分たちの命を救ってほしいというものでした。父、母、兄弟姉妹、さらにその人たちに連なる人たちも含めてです。

・ラハブはとても賢い女性でした。彼女は二人の斥候から「あなたに誠意と真実を示そう」という言葉を引き出します。ただこの決断は、ラハブの一族以外のエリコの人からすると、裏切り以外の何でもありません。

(1月 5日)「ヨシュア記 2:15~24」

ラハブは、「お言葉どおりにいたしましょう」と答えて、二人を送り出し、彼らが立ち去ると、真っ赤なひもを窓に結び付けた。

(ヨシュア記 2 章 21 節)

・ラハブは二人の斥候を助けます。その二人を窓から綱でつり降ろしたのです。随分力があるな、とも思いますが、城壁の壁面を利用したそうです。教会にも石垣があるので、一度試してみてもどうでしょうか。

・斥候とラハブは、契約を結びます。その契約のしるしとなるのは、真っ赤なひもです。昔「幸せの黄色いハンカチ」という映画がありましたが、それを思い出した方もおられるかもしれません。

・斥候は無事、ヨシュアの元に戻りました。6 章でラハブは約束通り助け出されます。このラハブの名は、ボアズの母として新約聖書にも登場します(マタイ 1:5)。イエス様の系図の中に、遊女の名前もあるというのは驚きです。

(1月 6日)「ヨシュア記3:1~8」

ヨシュアは民に言った。「自分自身を聖別せよ。主は明日、あなたたちの中に驚くべきことを行われる。」

(ヨシュア記3章5節)

・多くの聖書には巻末に、聖書地図が載せられています。その中の「出エジプトの道」を見ると、イスラエルの人々は一度カナンのおそばのホルマまでは行くものの、また遠回りしてカナンを目指したことがわかります。

・モーセが亡くなったネボ山はヨルダン川の東側にあります。カナンはヨルダン川の西側ですから、カナンに入るためにはヨルダン川を渡らなければいけません。しかしヨルダン川は大きな川です。

・そこでヨシュアは祭司たちに命じ、ヨルダン川の水際まで行かせます。神さまはヨシュアに、「わたしがモーセと共にいたように、あなたと共にいることを、すべての者に知らせる」と告げます。ヨシュアが新しいリーダーであることを、人々に知らしめるのです。

(1月 7日)「ヨシュア記3:9~17」

全地の主である主の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、川上から流れてくる水がせき止められ、ヨルダン川の水は、壁のように立つであらう。

(ヨシュア記3章13節)

・神さまはイスラエルの人々の前で、驚くべきみ業をおこないます。契約の箱を担いだ祭司たちが民の先頭を歩いていましたが、彼らの足が水際に浸ると水が壁のように立ち、人々は川床を歩くことができました。

・このような現象を、どこかで聞いたことはないでしょうか。イスラエルの人々がエジプトから逃げる際、イスラエルの民の行く手を紅海が阻みます。後ろにはイスラエルの戦車部隊が近づいてきます。そのときモーセが杖を上げると、海が二つに割れました。

・神さまはそれと同じことを、ヨシュアの手によっておこないます。この出来事は、モーセをリーダーと仰いでいた人たちがヨシュアも認める、そのきっかけになったのではないのでしょうか。

(1月 24日)「ヨシュア記8:24~29」

ただし、この町の家畜と分捕り品は、主がヨシュアに命じた言葉どおり、イスラエルが自分たちのために奪い取った。

(ヨシュア記8章27節)

・イスラエルの人たちは、アイの全住民を滅ぼし尽くします。旧約聖書にはこのような記述が多く、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教は同じ旧約聖書を土台としているため、争いが尽きないのでしょうか。

・特に今回は、アイの町の家畜や分捕り品は自分たちのために奪い取ってよいとされていました。こうなると、人間の欲望など汚い部分も見えていきます。しかしなぜ、アカンのときは禁止して今回はいいと言ったのでしょうか。

・何だか、神さまの気まぐれのようにも感じます。アイの人たちは、何か悪いことをしたのでしょうか。ただ「約束の地」と呼ばれる場所に住んでいただけです。現在のパレスチナの人たちのようです。

(1月 25日)「ヨシュア記8:30~35」

その後ヨシュアは、律法の言葉すなわち祝福と呪いをことごとく、すべて律法の書に記されているとおりに読み上げた。

(ヨシュア記8章34節)

・アイを焼き払ったヨシュアは、エバル山に祭壇を築きます。それまでイスラエルの人たちは、契約の箱を中心に幕屋で礼拝をしていました。いわば「移動式の礼拝堂」です。しかし「約束の地」に入った今、祭壇を築くという決断に至ったようです。

・ヨシュアが、「律法を読み上げる」という場面が出てきます。これは契約の更新と捉えることができます。モーセを通して命じられた律法を、もう一度民の前で朗読することによって、その言葉を確認するのです。

・そう考えると、新約聖書の中でイエス様がおこなった「山上の説教」は、新たな契約の更新だと考えることもできます。幸いな人とは誰か。敵は憎むのではなく愛しなさい。人を裁いてはならない。そのような「新しい契約」が語られていくのです。

(1月 22日)「ヨシュア記 8:9~17」

町の全軍も追撃のために呼び集められ、ヨシュアの後を追い、彼らはこうして、町からおびき出された。

(ヨシュア記 8 章 16 節)

・アイの町は、固い門に閉ざされた要塞のような場所だったようです。正面から攻め上ってもなかなかうまくいかないことは、7 章でも証明されています。そこでヨシュアは神さまが教えたとおりに行動するよう、兵に伝えます。

・まるで神さまが、「軍師」になったかのようです。この背景には、旧約の時代にイスラエルの人たちと異教の神々に仕える異邦人とが対立し、争いが日常的に起こっていたこともあります。

・アイの人たちは一度勝利した相手なので、油断していたのでしょう。イスラエルの人たちを完膚なきまでやっつけようと思ったのかもしれませんが。そのために町の門を開けたままで、みんな外に出てしまいます。「ありえない」状況が起こるのです。

(1月 23日)「ヨシュア記 8:18~23」

アイの王は生け捕りにされ、ヨシュアのもとに引き出された。

(ヨシュア記 8 章 23 節)

・イスラエルの人たちは、アイを占領しました。争いが嫌いなわたしにとって、この物語をどう理解したらよいか、悩むところです。神さまの導かれるままに行動したら、結果がついてきた、という感じでしょうか。

・旧約聖書が伝えようとしているのは、神さまに信頼を置く民とそうでない人たちとの違いです。アイの人たちが信じる神々よりも、イスラエルの神の方が素晴らしいということもまた伝えているように感じます。

・結果的にアイの王は生け捕りにされ、ヨシュアの元に引き出されます。この出来事を見て、イスラエルの人々はさらに神さまに忠誠心を抱くのです。わたしたちの信仰とは、ちょっと違うようにも思えますが。

(1月 8日)「ヨシュア記 4:1~7」

彼らに命じて、ヨルダン川の真ん中の、祭司たちが足を置いた場所から、石を十二個拾わせ、それを携えて行き、今夜野営する場所に据えさせなさい。」

(ヨシュア記 4 章 3 節)

・イスラエルには、12 の部族がありました。それはヤコブの子であるルベン、シメオン、ユダ、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イッサカル、ゼブルン、ベニヤミンという 10 人に、ヨセフの子であるマナセ、エフライムを加えた 12 人の名を持つ部族です。

・レビもヤコブの子ですが、祭司の家系として土地を持たなかったため、12 部族には入れられないことが多いです。さて、聖書はこの 12 という数をとっても大切にしてきました。イエス様の弟子の数も 12 です。

・イスラエルの人々がヨルダン川を渡り切ったとき、神さまはヨシュアに「12 部族の代表を選び、石を拾わせ、それを据えさせなさい」と命じます。12 部族が共に渡ったということが、大切なのでしょう。

(1月 9日)「ヨシュア記 4:8~14」

ヨシュアはまた、契約の箱を担いだ祭司たちが川の真ん中で足をとどめた跡に十二の石を立てたが、それは今日までそこにある。

(ヨシュア記 4 章 9 節)

・旧約聖書の中には「それは今日までそこにある」という表現が出てくる箇所があります。遺跡のような形で、大切にされてきたのでしょうか。ただ調べてみましたが、「そこにある」という確かな情報は見つかりませんでした。

・「しるし」というものを、わたしたちも大切にします。神さまとの関係に限らず、人生の節目で誰かにもらったものなど、宝物にすることがあります。そしてそれを誰かに見せるときには、どうしてそれを手に入れたのかを説明するでしょう。

・神さまがヨルダン川のほとりに据えさせた 12 の石には、そのような意味がありました。神さまが水をせき止めるという不思議な業をもって、イスラエルの人々を導いたしるしです。彼らはそれを、次の世代へと伝えていくのです。

(1月 10日)「ヨシュア記 4 : 15~24」

それは、地上のすべての民が主の御手の力強いことを知るためであり、また、あなたたちが常に、あなたたちの神、主を敬うためである。」

(ヨシュア記 4 章 24 節)

・神の箱を担いだ祭司がヨルダン川からあがると、せき止められていた水は前のように流れ出しました。出エジプトの際の紅海の奇跡では、水が元に戻ったためにエジプト軍がおぼれるということがありましたが、ここでは犠牲者は出なくてよかったです。

・イスラエルの人々は、ギルガルという場所に宿営します。ギルガルはエリコの町の東の境にあります。エリコではすでに 2 章で二人の斥候が活動していました。いろんな情報を得ていたことでしょう。

・これは第一の月の十日の出来事です。これからすぐにエリコに軍を向けるかということ、そうではありませんでした。神さまは彼らに、「契約のしるし」を求めます。その内容は、明日読むことにしましょう。

(1月 11日)「ヨシュア記 5 : 1~9」

そのとき、主はヨシュアに、火打ち石の刃物を作り、もう一度イスラエルの人々に割礼を施せ、とお命じになった。

(ヨシュア記 5 章 2 節)

・出エジプトから 40 年がたち、イスラエルの人々はようやくヨルダン川を渡りました。その間に、「エジプトを出て来たすべての民、戦士である成人男子は皆、エジプトを出た後、途中の荒れ野で死んだ」とのことです。

・イスラエルの人たちはエジプトを出て移動する中で、何度も神さまに対して反抗します。その様子は民数記 14 章などにも書かれていますが、その結果、神さまは彼らを約束の地に入れないと告げるのです。

・創世記 17 章で定められた割礼は、エジプトを出る前にイスラエルの民に施されていました。しかしその人たちがみな荒れ野で死んだため、ヨシュアはここで人々に割礼を施します。割礼は神さまとの契約なのです。

(1月 20日)「ヨシュア記 7 : 22~26」

ヨシュアの出した使いたちがアカンの天幕に走って行って見ると、果たして彼の天幕の中に、銀を下に敷いて地下に埋めてあった。

(ヨシュア記 7 章 22 節)

・神さまが指摘したアカンは、罪を告白します。「わたしは、確かにイスラエルの神、主に罪を犯しました」と。もう言い逃れはできないと、彼は覚悟を決めたのでしょうか。彼が奪ったものはこうでした。

・一枚の美しいシニアルの上着、銀二百シェケル、重さ五十シェケルの金の延べ板です。確かに魅力のあるものです。それらを天幕の地下に、銀を下に敷いて埋めているとアカンは言いました。

・罪を告白したものの、神さまの怒りをしずめるために、イスラエルの人たちはアカンを、そしてその家族をも打ち殺します。使徒言行録でアナニアとサフィラが土地を売った代金をごまかし、息絶えた物語（使徒 5 : 1~11）を思い出します。

(1月 21日)「ヨシュア記 8 : 1~8」

町を取ったらこれに火を放ち、主の言葉どおり行いなさい。見よ、わたしはこう、あなたたちに命じている。

(ヨシュア記 8 章 8 節)

・ヨシュア記 7 章でイスラエルの民は、アイに攻め込むのに失敗しました。その大きな原因は、神さまによって禁じられていた「分捕り物を自分の物にする」ということをアカンがしたために、神さまが怒ったためです。

・その怒りは、アカンとその家族が罰を受けることでおさまったようです。しかしもう一つ、失敗の原因がありました。それはアイに攻め込むときに、自分たちだけで作戦を立てて実行したことです。

・今回はどのように攻め上ると良いのか、神さまはヨシュアに伝えます。神さまは敵をおびき寄せるという方法を伝え、ヨシュアはイスラエルの人たちにそれを実行させるのです。神さまの導きを信じたということです。

(1月18日)「ヨシュア記7:7~13」

イスラエルは罪を犯し、わたしが命じた契約を破り、滅ぼし尽くしてささげるべきものの一部を盗み取り、ごまかして自分のものにした。

(ヨシュア記7章11節)

- ・アイで戦いに敗れたヨシュアは、神さまに不平をもらします。エリコするときには関の声だけで城壁が崩れたのに、全軍をつぎ込まなくても大丈夫と思っただけでアイの前に敗退したわけですから。
- ・神さまはなぜ、イスラエルがアイの前に敗退したのかを伝えます。イスラエルの罪とは、神さまが命じた契約を破り、滅ぼし尽くしてささげるべきものの一部を盗み取り、ごまかして自分のものにしたということです。
- ・本来であれば神さまにお返しすべきものを、自分の懐に入れてしまった。神さまの怒りの大きさはともかく、わたしたちもやってしまいそうなことです。「すべてのものは主のたまもの」という思いを忘れないでいきたいものです。

(1月19日)「ヨシュア記7:14~21」

ザブディ家の男子を一人ずつ進み出させると、ユダ族のゼラ氏族に属するザブディ家のカルミの子アカンが指摘を受けた。

(ヨシュア記7章18節)

- ・「犯人さがし」がおこなわれます。名探偵コナンや相棒などでは、いろんな人の言葉や行動、さまざまな証拠をもとに推理を組み立てていきますが、聖書の中ではグループごとにわけ、「主の指摘」を受けるのです。
- ・部族ごと、氏族ごと、家族ごと、そしてその中の男子の中から指摘を受けるのですが、一体どのような感じで指摘されたのでしょうか。光が当たったとか、煙に包まれたとか、どうだったのでしょうか。
- ・そこに集められた人たちは、たとえ犯人ではなかったとしてもかなりドキドキしていたのではないのでしょうか。知らずに犯した罪もあるかもしれません。ただ一回でアカンを指摘した方が早いような気がします。

(1月12日)「ヨシュア記5:10~15」

彼らが土地の産物を食べ始めたその日以来、マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった。彼らは、その年にカナンで取れた収穫物を食べた。

(ヨシュア記5章12節)

- ・イスラエルの人たちは割礼を受けたギルガルで、宿営をします。そしてエリコの平野に行き、過越祭を祝います。ヨルダン川を渡ったのが第一の月の十日、そして過越祭はその月の十四日におこなわれました。
- ・その日を境に、彼らにはマナが与えられなくなりました。神さまは40年間、マナで荒れ野のイスラエルの人々を養っていましたが、カナンの土地に入ったことでもうその必要はなくなったということでしょう。
- ・そして13節以降には、不思議な出来事が書かれています。抜き身の剣を手にした一人の人が、ヨシュアに向かって立っていたのです。彼は主の軍の將軍でした。明日以降、イスラエル軍はエリコに向かいます。

(1月13日)「ヨシュア記6:1~5」

エリコは、イスラエルの人々の攻撃に備えて城門を堅く閉ざしたので、だれも出入りすることはできなかった。

(ヨシュア記6章1節)

- ・いよいよヨシュア率いるイスラエル軍は、エリコの城を攻めようとします。戦国時代のお城の中には、「難攻不落」と称されるものがあります。エリコの城も、そのようなものだったのでしょうか。
- ・このとき神さまはヨシュアに、不思議なことを命じます。6日間、7人の祭司と兵士たちは町を一周します。そして7日目だけは町を7周し、あわせて祭司たちには角笛を吹き鳴らしなさいと告げるのです。
- ・ヨシュアはこの神さまの言葉を、どう受け止めたのでしょうか。多分そこに疑いがあれば、町の城壁が崩れ落ちることはなかったのでしょうか。しかしヨシュアは、神さまの言葉を信じ、受け入れたのです。

(1月 14日)「ヨシュア記 6:6~11」

彼はこうして、主の箱を担いで町を回らせ、一周させた。その後、彼らは宿営に戻り、そこで夜を過ごした。

(ヨシュア記 6章 11節)

- ・ヨシュアは神さまが伝えたままを、祭司たちに命じます。彼らにとって一番大切なものは、契約の箱でした。その箱を中心にして、祭司や兵士が町の周りを回っていきます。声は出さずに、ただ角笛の音だけが響きます。
- ・エリコの人たちは、不気味だったでしょう。彼らは、ヨルダン川の水がせき止められて、その中をイスラエルの人たちが歩いていったということも知っていました。恐ろしい民族だと思っていたと思います。
- ・この様子をイメージしている中で、竣工式を思い出しました。新しい建物の周りを、詩編を唱えながら回っていく。回る回数や言葉を発するところは違いますが、神さまの建物が与えられたときに礼拝する。何か共通点もあるような気がします。

(1月 15日)「ヨシュア記 6:12~21」

角笛が鳴り渡ると、民は関の声をあげた。民が角笛の音を聞いて、一斉に関の声をあげると、城壁が崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。

(ヨシュア記 6章 20節)

- ・イスラエルの人たちはヨシュアに命じられた通り、6日間エリコの町の周りを回っていきます。エリコの人たちは、初日や2日目こそいつ急に襲われてもいいように、弓矢を構えていたりしたかもしれません。
- ・しかし3日目、4日目と何も起きず、5日目、6日目になると、もう何もないのだろうと高を括っていたでしょう。しかし7日目、いつもと違いイスラエルの人たちは町を七度回ります。それはこの日だけのことでした。
- ・そしてイスラエルの人たちは角笛を鳴らし、関の声をあげます。その声にあわせて、城壁は崩れ落ちました。この出来事はあくまでも神さまのみ手によるものだ、ということをお聖書は伝えているのです。

(1月 16日)「ヨシュア記 6:22~27」

斥候の若者たちは行って、ラハブとその父母、兄弟、彼女に連なる者すべてを連れ出し、彼女の親族をすべて連れ出してイスラエルの宿営のそばに避難させた。

(ヨシュア記 6章 23節)

- ・イスラエルの人たちは、エリコの人たちを打ち破りました。いつも思いませんが、一方的に滅ぼされる人たちはかわいそうです。しかしここで目を向けないといけないのは、イスラエルの人たちと神さまとの信頼関係です。
- ・イスラエルの人たちは神さまの命じるとおりにおこないました。ここが大切なことです。さらに斥候を救ったラハブ一族を、彼らは助けます。そのラハブから、エッサイやダビデ、イエス様という系図が続くのです。
- ・ラハブはエリコの遊女でした。しかし神さまは彼女を用い、そしてイスラエルの人たちは彼女をないがしろにしないで約束を守っていく。神さまの計画が不思議な形で実行されていくのです。

(1月 17日)「ヨシュア記 7:1~6」

ヨシュアは衣服を引き裂き、イスラエルの長老たちと共に、主の箱の前で夕方まで地にひれ伏し、頭に塵をかぶった。

(ヨシュア記 7章 6節)

- ・この7章には、「神さまへのささげ物」について書かれます。旧約聖書には「ささげ物の規定」がかなり細かく書かれています。その中に、「滅ぼし尽くしてささげる」という決まりがあります。
- ・戦争のときに、いわゆる「戦利品」を獲ることがあります。衣類や武器、金銀などですが、「分捕り物」という名で書かれることもあります。しかし聖書で「滅ぼし尽くす」と書かれたときには、そのような戦利品を自分のものにしてはいけないのです。
- ・そのようなものは、すべて神さまの物だという考えがその根底にあります。しかしアカンという人は、欲望に負けてしまったのでしょう。その一部を盗み取ってしまいます。あかんことです。